

鳴き続ける蟋蟀（こおろぎ）でいたい

農民作家・飯島勝彦



式部集落。右端に飯島さんの家、左端に梨の木の家がある。

羽田ゆみ子さんから、梨の木舎のホームページへ何か書いてみないか、と声をかけられた。

梨の木舎からは以前『夢三夜』という小説集を出版していただき、一年前には『銀河鉄道の夢』を出してもらった。それを終（つい）の本としてホッとした思いと同時に、なにか忘れ物をしているような気懸かりと、老齡を逃げ道にしたような責めを感じていた。

まだリタイヤの時ではないと、場所まで用意いただいたことを有り難く思う。

ゆみさんと私は郷里が同じで、住居は500mほどの近距離にある。集落名を「式部」といい、平安文化の匂いもあるが関係なく、開田した産土神社の主が「式部太夫」を名のったという説がある。

私が集落に馴染んだ時には、ゆみさんの一家は先隣の上田市へ移られており、「梨の木の家（うち）」と呼ばれる実家は祖母（おばあ）さんが留守居をしていた。むかし「屋敷に大きい梨の木があったそうだと、子供の頃から聞いていた。父もそう言ったが「見た」のではなかった。多分その前からの言い伝えで、食材用に柿の木や桃の木は各戸にあったが、古木の梨の木は珍しく目立ったのだろう。

年を経て対面したゆみさんは、屋号を社名にした出版社「梨の木舎」の社主になっていた。お会いした望月の「多津衛民芸館」で出版の依頼をしたところ、「小説を出版したことは無いんですよ」と言われたが、吉川館長の口添えもあり、`家が近い、地の利もあって引き受けていただいた。

学術的な、或いはドキュメント的な教養本を、錚々たるメンバーが執筆されている中へ、場違いの異物を投げこんでしまったような後ろめたさがあったが、勢いにまかせて「終（つい）の一冊も」厚かましくも口走ってしまった。

その後、ゆみ子さんは郷里の式部に居を移し、在郷と在京を往来する暮らしになった。出版業と共に、地元の学習塾民芸館、NPO法人などでも活躍しておられる。途中、入院や手術もされたが、それは私も同様で、五年前に妻を亡くしたあと、宿痾の肺気腫が進行し急性肺炎で入院。2年前から濃縮酸素吸入器付人間になってしまった。

お互い闘病の身になったが、「終の一冊はまだ？」と、先に声をかけてくれたのはゆみ子さんだった。思えば年齢だけでなく、体力も脳力にも先が無い。終の一冊は亡妻とも約してあり、何よりも己（おのれ）の人生の締めをしなければならなかったのだ。それを、共に闘病中の、私よりだいいが若い隣人、のほうから言われてしまった。目の覚める思いがした。

これまで出した本には全て、井手孫六さんが推せん文を書いてくれた。それが、3年前に泉下の人となられた。孫六さん著「抵抗の新聞人 桐生悠々」にある「蟋蟀（こおろぎ）は鳴き続けたり嵐の夜」という、悠々の句に共感していた私は、孫六さんへの感謝と悠々への敬意をこめて終（つい）の書の括（く）りにしようと思っていた。

この句は、長野県の代表的な地方紙『信濃毎日新聞』の主筆をしていた桐生悠々が、社説に「関東防空大演習を嗤（わら）う」を書き、軍部と郷軍同志会の脅迫により退社させられるも、名古屋で個人誌「他山の石」に倚（より）、事実（真実）を書き続ける覚悟を詠んだものだ。

「銀河鉄道の夢」を脱稿した昨年の秋、佐久市内にある母校、野沢北高校の創立120周年記念祝賀会が開かれ、出席できなかった私は知己から資料をいただいた。メインの記念フォーラムには同窓の7人がパネラーとして登場していた。うち5人がジャーナリズム関係で、紹介すると、いではなく（作詞家）、吉岡忍（前日本ペンクラブ会長）、原真人（朝日新聞東京本社編集委員）、青木理（フリージャーナリスト・サンデーモーニング）、小田木順子（幻冬舎新書編集長）の各氏。他の2人は佐々木剛史（TLO京都顧問）、小泉修一（脳科学社・山梨大学医学部教授）である。

各パネラーの発言のなかで、私が特に注目したのが原真人（まこと）さんと青木理（おさむ）さんだった。原さんは学校の図書館で、青木さんは父の書齋で、共に高校時に井手孫六著「抵抗の新聞人 桐生悠々」を読み、「感銘を受けてジャーナリストを志した」とあった。

孫六さんは旧制野沢中学の大先輩で、旧南佐久郡臼田町の出身、私は旧北佐久郡望月町だが、合併して今は両町とも佐久市になっている。加えて、孫六さんは私が「地上文学賞」（「家の光協会」）を受賞した時の選考委員で、以来文学の師として警咳（けいがい）に触れることになった。

その井手孫六さんが、「書かねばならむことを『義務の履行』として書いた本物の言論人」と世に問うた桐生悠々の魂が、時を超えて継がれていく因縁（…）に奇しくも対面したという、鮮烈な感動に襲われた。『銀河鉄道…』の終（しま）いを「蟋蟀…」の句で締めたのも同じ因縁だったのでは、という気がした。

原さんは市内岩村田の出身で、「アベノミクス」の命名者である。元首相への揶揄（やゆ）が本人に通じず、誉め言葉だと勘違いされてしまった。と嗤（わら）う。青木さんは隣の小諸市の出身。

「メディアや出版人たちが自ら膝を折り、政権や与党に媚びる提灯持ちが列をなし」と嗤（わら）いしつつも、「おまえはちゃんと鳴き続けているか」を常に自問し、岩波現代文庫が再刊した孫六著「抵抗の…」の解説文を書いている。

資料をいただいた市内の喫茶店「白樺」のオーナーにお願いし、原さん、青木さんにつながしてもらい、交遊の糸口をつけてもらった。

近年この国の政治は、一部のコアを除き頽廃と無責任の極みにある。国を守るならば、軍備ではなく、防災と食糧自給を急がなければならない。「木造家屋が密集する東京に爆弾は落とさせない防空戦略が肝要で、投下を前提とした訓練は敗戦と同じ」と論破しつつも生計（たつき）を絶たれた、泉下の悠々の切ない嗟（わら）いが目に見えるようだ。

兄ほどの孫六さん、子ほどの原さんと青木さんと同窓の蟋蟀の一匹として鳴き続ける。それがわが余後の使命であると思えてきた。

明治初期から国の人口は4倍になったが、わが集落は半分に減った。戸数はあまり変わらないが、空屋率は3割である。

老いた自然薯の目から見える叙景や思いを、以後折にふれて綴ってみたい。

(2023. 12. 15)

飯島勝彦(いいじま・かつひこ)

1939年長野県佐久市(旧望月町布施)生まれ。県立野沢北高校卒業。

布施村農協、望月町農協、佐久しらかば農協に35年間勤務。

この間「館報もちづき」編集長、望月町連合青年団長、望月町議会議員を歴任。

退職後、農業を営む傍ら小説を執筆。

1998年「鬼ヶ島の姥たち」で家の光協会 第45回地上文学賞。

2004年「銀杏の墓」で第47回日本農民文学賞。

2006年小説集「埋火」で第23回山室静・佐久文化賞。

長野県佐久市在住。

日本ペンクラブ会員。

日本農民文学会長野支部長。

NPO法人多津衛民芸館顧問。

著書

『鬼ヶ島の姥たち』(郷土出版社)

『埋火』(郷土出版社)

『恍惚の里』(郷土出版社)

『冬の風鈴』(郷土出版社)

『夢三夜』(梨の木舎)

『銀河鉄道の夢』(梨の木舎)

